釣れ釣れなるままに

２０１２年思い出の釣行記 PART.　２

洞窟探検

鹿島釣狂

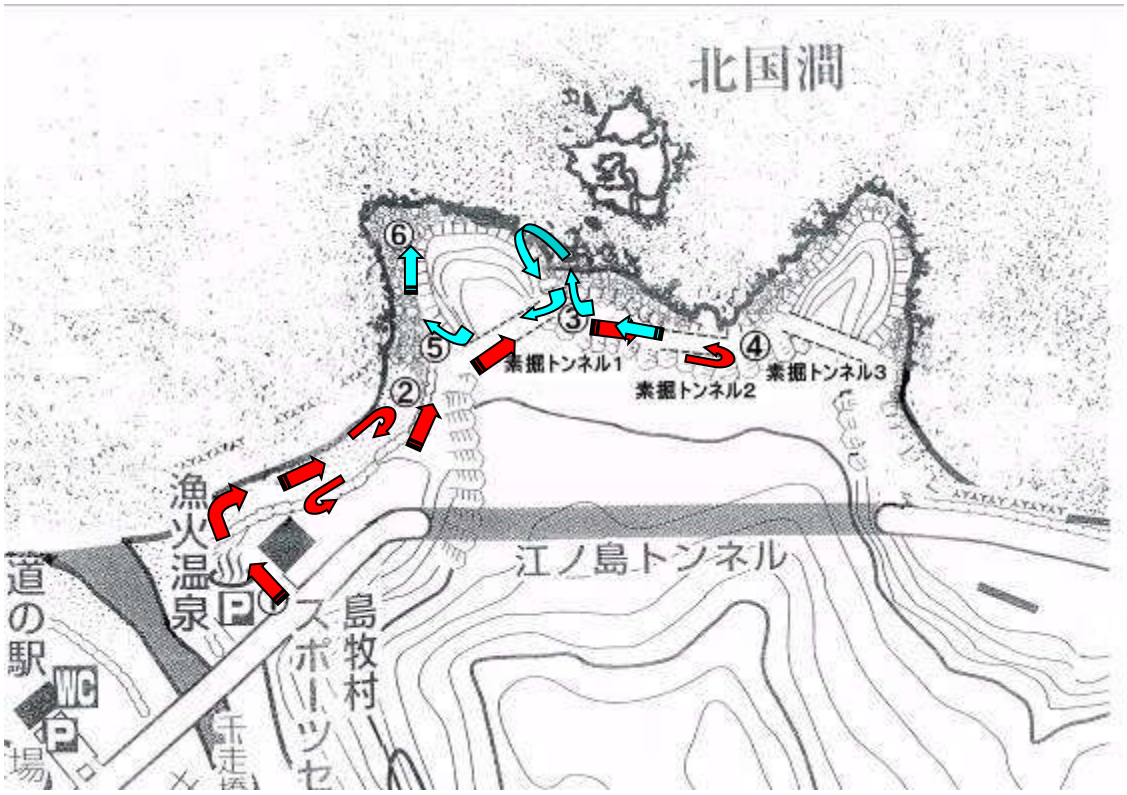
北国澗への思い

平成２４年度岩見沢釣遊会第２回大会が５月１３日、寿都港～第二栄浜港で交綸会主催合同大会として開催された。大会が近づいてきた頃、バス会社から電話が入った。「釣遊会の大会は５月２０日と連絡をくれていたので、１３日は用意していなかった。交綸会の事務局から１３日の運行確認の電話があったが、どのようにしたらよいか。」というものだ。私は「釣遊会の全７回の大会についての予定を連絡したが、交綸会主催大会の日程が変わったので、交綸会事務局より連絡がいっているはずだ。交綸会主催大会は交綸会に任せている。急かもしれないがバスを何とか手配して欲しい」と応えたが、バスが運行できないのではという不安が襲ってくる。後で、交綸会事務局に電話を入れてみると「３週間前ほどに連絡を入れてあったが、バス会社内での連絡ミスだった。バスは予定通りに１３日に走れるようになった」ということだった。ホッと安堵の胸を撫で下ろした。

今回の釣り場候補を弁慶岬、北国澗、穴澗平盤と絞っておいて、バスの中でそれぞれ情報をいただいてから決定することにしていた。穴澗へは岡氏、大前氏が入る予定で、穴澗左先端は一人の場所なので釣り場がかち合うことになる。嵐氏が、「おまえが通っているワスリが最近はよいようだ。ワスリといっても広いのでどの辺りかは分からないが名人会の金井氏が行きたいと言っていた。おまえの好きな弁慶岬も最近はよいようだよ。」との情報をくれた。

過去の「北海道のつり」に掲載された北国澗での五十嵐明氏があげた大物ソイと大物真ガレイの記事が忘れられず、北国澗についても聞いてみた。すると岡氏が「佐々木秀美氏に一緒に連れて行ってもらったことがある。素掘りトンネルを２つ抜けたところに一段高くなった岩があるのでそこから下りて、左に行くと北国澗の左先端に出ることが出来る。

『北の釣り会』の佐藤貢氏が得意とする場所で、先端ではなく、少し下がったところから千走漁港に向けて打つとよいようだ。」との耳寄りな情報をくれた。釣り場を北国澗と決定した。



北国澗へのルート

ルート探し

　バスから降りて千早川沿いのスポーツセンターの横①を通って海岸縁に沿って歩いて行くと、行き止まり②になってしまった。そこからでは上に見える草地に直接上がれそうもないので、もう一度、海岸線を戻ってから一段高くなった空き地を進むと、踏み分け道が続き最初の素掘りトンネル１が見えてきた。人一人が通れるくらいのものかと思っていたが車が通れるほどのなかなか大きなトンネルだった。そのトンネルをくぐり抜けたところに岩棚③があったので一旦荷物をそこに置いてから２つ目の素堀トンネルに向かった。獣道は更に狭くなり木々も生い茂って手ぶらでも先に進むことが難しくなってきた。やっとの思いで第２の素掘トンネルに辿り着いたが、そのトンネルを通り抜けてみるとその先④はとても進めるような状況ではないので引き返すことにした。今度は荷物を置いたところ③にあった険しい崖のようなところを下りてみる。なかなかの急勾配で、つかまるものもないところをやっとのことで海岸縁に出た。正面には中之島が見えたのでそこから左方向

に向かって進んでみる。大きな岩々が連なり、先へ進むのが困難なように思われた。おそらくこれとは違う道があるのだろう。先ほど下りたところに戻ってみるが、木々の間を抜けてきたのでその入口がなかなか見つけることが出来ない。どこから下りてきたのだろう。早く釣り場に立ちたいとの焦りがこの結末だ。そこを何とか探し当てることが出来て、元来た道を引き返して一つ目のトンネルへと戻る。来たときは入口に当たるが今は出口⑤となるところに大きな岩の割れ目があり，そこから続く洞窟を潜り抜けることが出来そうである。縦に裂けたような狭い隙間をずり落ちるように進んでいくと海岸線に突き抜けることが出来た。そこから海岸縁に沿って歩くとようやく目的の釣り場⑥に立つことが出来た。置いてきた荷物を取りに戻り、再度担ぎ直して北国澗の左先端に立った。

お間抜けさん

　ゴロ天秤ネット仕掛を近投する。ゴロネット仕掛を中投する。千走漁港に向かって２本バリ仕掛けを遠投する。しかしアタリはさっぱり出ない。３時頃、ガガガッとしたアタリが出てハチガラがあがった。ようやくの１匹目をフラシに入れる。その後、忘れたようにポツンポツンとチビホッケやチビアブラコ、チビカジカがきた。近投は張り出し部分のハエネに根掛かりを繰り返す。

　あまりにも釣れないので酒に手を付けてしまった。そのうちに日が昇りぽかぽかと暖かな陽気になってきて、座り込んでしまいウトウトとしてきた。最初の行程で疲れ切ってしまっていたのだ。カラスがそんな自分を見透かしたように、三脚の周りに散らばっているゴロの頭を持って行く。そして、「捨てたイカゴロならいいでしょ」とでも言いたそうに、こちらの様子を伺っている。こちらも追っ払うこともせずにただただ見つめているだけだ。そのうちに図々しくもカツオまで狙い始めた。首をクリッ、クリッと回しながら「あんたなんか知らないよ」とでも言いたげに、ちょん、ちょん、ちょんと横ステップで近づいてきてカツオの半身をガバッと口に銜えた。慌てて大声を出して立ち上がった。カラスも慣れたものでさっと身を翻してカツオを銜えたまま飛び去っていってしまった。そして高岩の頂上で「クワー、クワー」と声高々に鳴いた。私にはまるで「お間抜けさん」とでも言っているように聞こえてきた。

サクラマスを狙う釣り人

　そのうちにサクラマスを狙った３名の釣り人がやって来た。一人目は先週、ここで６０㎝を上げたといい、海の様子を眺めていたが、私がウトウトしている間にいなくなってしまっていた。二人目は写真に写っている手前のルアーマン。そして３人目は奥にいるウキフカセマンがオオナゴを付けて投げていた。しかし、３人とも私にはサクラマスを釣り上げるところを見せてはくれなかった。そして、今日は９時上がりなので帰りの行程が心配になり引き上げることにした。

４．貧弱な釣果　小さいカジカは水たまりに潜り込んで見えなくなった。

帰り道を確認する為に、ショアサクラをやっている人に聞くと、私が最初に下りた第１の素掘トンネルを抜けたところから下りて海岸縁を通って来たという。私の通った洞窟は、岩が落ちてくるので危ないと聞いているともいう。知らないということは恐ろしいことだ。

しかし、近道になるのは確かなので、その危険な洞窟を再び通って帰ることにした。釣果も無く荷は軽く、海岸縁の一段高くなった岩を勢いよく上ると頭をガツンとしこたま打ち付けた。上を見ると岩がオーバーハングして突き出ていたのだ。その岩の根元は分厚くて簡単には崩れることは無いと思うが、周辺を見ると、崖から崩れ落ちてきたと思われる大岩があちこちに転がっている。そして、再びそのオーバーハングした岩の上に目を移すと、カラスが私をあざ笑うように「クワー、クワー」と声高々に鳴いた。

オーバーハングした岩を避けて遠回りをして歩いていると、ふと――この岩が落ちてきたら苦しまないで一気に死ねるだろうか。頭もすぐにつぶれるだろう。痛さや苦しさを感じている暇は無いだろう。それもいいのかもしれないな。この先年老いて体が不自由になったり、大きな病を抱えて苦しんだりすることもあるだろう。――なんて事を考えてしまった。でも今は死ねない。もう少し釣りがしたいのだ。もう少し遊びたいのだ。もう少し人生を楽しみたいのだ。

５．赤矢印の方向に進んでいくのだが、その通り道の頭上にはオーバーハングした岩（黄矢印）がせり出していた。

洞窟の入り口にやってきた。写真で見るとこの穴は小さいようだが人一人が立って歩くには支障がない。深夜の闇の中でよくこんな穴を見つけたものだと我ながら感心する。来たときはただただズルズルと滑る様に下りたのだが、上るとなるとなかなか厄介である。リュックの上に横にした竿が岩に引っかかったときは身を低くして這いずる様にして上った。

６．行きも帰りも、この割れ目から続く洞窟をくぐり抜けたのだ。

審査結果

優　　勝	嵐　光博	１３６９点	(アカハラ463㎜+カレイ　353㎜+5530g)	寿都港
準優勝	川原要四郎	１３５０点	(アブラコ405㎜+ホッケ　400㎜+5450g)	栄　磯
３　　位	岩本　満	１３０２点	(アブラコ414㎜+ホッケ　403㎜+4850g)	山　中
４　　位	前野達志	１２６１点	(アブラコ415㎜+ホッケ　378㎜+4680g)	軽　臼
５　　位	桑原　理	１１２１点	(アブラコ378㎜+ホッケ　323㎜+3680g)	山　中
身長優勝	大西正春	１１８０点	(ホッケ　432㎜+アブラコ264㎜+4840g)	軽　臼

優勝の嵐氏は、得意の寿都矢追にするかどうかと悩んでいたが、寿都漁港で着替えの最

中、何を思ったか港の中に消えていった。本日の波具合を判断して寿都漁港でアカハラを狙い、明け方、波が治まってから矢追に向けてアブラコを取りに行こうという作戦に出たのだ。それがまんまとはまり防波堤を襲う轟々とした波音に矢追は無理と判断して漁港で粘ったのだ。寿都漁港で彼を迎えた時、竿道会の菅原氏は彼の執念に感服した様子を伝えてくれた。隣で竿を振っていたらしいのだが、漁船の下から寿都漁港では特大と思われるアカハラを引きずり出し、嫁にしたクロガシラも３５．３㎝あり、前回の堀内氏の記録を早々と塗り替えてトップに立ったのだ。嵐氏のバッカンを覗かせて頂くとクロガシラが二十数枚も入っており、店に並べるのかと思うほどだった。嵐氏の対岸でやっていた谷口氏もやはりアカハラとクロガシラで７位入賞を果たした。

準優勝は川原氏だった。得意とする栄磯の舟揚場は、比較的波が落ち着いており、アブラコ，ホッケの大物をゴロッと揃えてきたのだ。３位の岩本氏は寿都山中に入り、大物のアブラコにホッケを数揃えて高得点をたたき出した。交綸会では第１回大会での貝取澗の優勝に続き２連覇である。身長優勝は軽臼平盤でホッケの４３．２㎝を射止めた大西氏であった。私は残念ながら１０６４点で入賞外の１１位だった。

入賞者

左から２位：川原要四郎、優勝：嵐　光博　３位：岩本　満　身長優勝：大西正春

猪・鹿・蝶の揃い踏み

釣遊会第２回大会がどうも消化不良で、次週５月１９日、「とんとん会」の大会に参加させていただいた。土曜日開催で自由に釣り場を選択できるので、入釣予定候補を普段は入れそうもない砂政泊平盤・軍艦岩、栄磯平盤、大平川河口平盤に絞り、「とんとん会」の皆さんのお知恵を借りて決定することにした。会長の荻野氏は私の現在の職場の前任者である。仕事にかこつけて職場に何度も足を運んでもらって教えを請うた。

バスの中ではＨ宴会部長の仕切りで和やかに過ごすことができた。今日の釣り遠足のために宴会部長は前日から食材を仕込み、出発当日は朝から調理に励んでいたらしい。出てくるつまみが尋常なものではない。まず出てきたのが猪のチャーシューである。北海道では猪のご相伴にあずかることはなく、皆、初体験の味を楽しむ。次に出てきた鹿は道内ではおなじみになってきたが、チャーシュー仕立てにしたその味は絶品だった。「猪」「鹿」とくればその次は「蝶」でも出てくるのかと思っていると、馬が出てきた。しかしそれはナンコウで確かに「腸」である。愛でたく花札の一役がそろったのだ。馬のナンコウは北海道の炭鉱地ではなじみが深いが、そうそう口にするものではない。これがまた素晴らしいのである。タッパに入れて回してくるのだが何度も箸を付けた。海のものあり山のものあり、宴会も絶好調に盛り上がった。

私は、初めての釣り場となる栄磯平盤に下り立った。周辺には誰も釣り人がいなかったので、どこでも自由に使える状況だった。舟揚場が幾つかあったのでその舟揚場で暗い内はカジカを狙おうかとも思ったが、まずは一番の狙いであった平盤左先端に竿を出すことにした。平盤の先端までいくつかの溝があると聞いていたが、その溝は深くなく比較的楽に入ることができた。バスから降りたのは日付が変わった頃だったが、実際に竿を出したのは２時頃だった。ゆとりがあるので焦らずにのんびりとあちこち見学することが出来たのだ。

最初のアタリは１時間ほどしてからだったが、遠投に３０㎝ほどのアブラコが来た。近投にもチョコチョコとアタリが出るようになってきたが食い込まない状況が続いた。タナゴかローソクボッケでも悪戯しているのだろうと思うが正体を確かめたい。竿を手に持って小さなアタリに合わせて何とか魚を取り込むことが出来たが２０㎝ほどのローソクボッケだった。他にアタリは出ないので、大物に備えたチヌバリ８号、ハリス５号から、ハリを丸セイゴ１４号、ハリスを３号に落として甘エビを小さく切って付け替えた。やっと２５㎝ほどのホッケが釣れ続いた。その仕掛けにばかりアタリが出て忙しくなってきたが、３０㎝を超えるホッケは出ずにローソクボッケばかりである。

クロガシラが釣れた。そしてまもなく大きなホッケを岸近くまで寄せたのだが、少し高くなった岩盤に上げるときにすっぽ抜けてしまった。ハリが小さすぎたのだ。数だけ釣ってもしょうがないのでもう一度ごつい仕掛けと大きなカツオのエサに変えて釣りを続けると、ようやく４０㎝ほどのカジカが釣れた。そして遠投でもアタリが出るようになりアブラコやガヤが釣れた。夜が明けても釣り人は誰も来ないので、今度は平盤右先端に展開し

た。そこでも大きいものは出なかったがアブラコ、真ガレイ、ホッケが釣れた。

今日は比較的のんびりとした釣りができた。荷物を早めに片付けて付近の釣り場を見て歩くことも出来たのだ。このような釣りをさせていただいた「とんとん会」の皆様にお礼を申し上げたい。私の成績はカジカ４０㎝、アブラコ３５㎝程で６位だった。そして本日の優勝者はＨ宴会部長だった。折川でカジカ、アブラコの大物をそろえて「猪・鹿・蝶」の役をそろえてきたのだ。めでたし、めでたし。どっぺんぱらりの、ちょん。

５月１９日の釣果